

【書評】

ケイン樹里安・上原健太郎 編著
『ふれる社会学』
(北樹出版、2019年)

白波瀬 達也 (関西学院大学)

1. 本書の概要

『ふれる社会学』は大阪市立大学大学院文学研究科で社会学を修めた1980年代生まれの2人の若手社会学者、ケイン樹里安と上原健太郎が編んだ入門書である。ただし、オーソドックスな入門書とは毛色が異なる。「はじめに」でも述べられているとおり社会学の重要トピックを網羅的に扱った入門書ではないのだ。本書は「見過ごすことができない身近な14のテーマ」を取り上げ、読者に社会的なものを見方を習得してもらうことを目的としている。本書の構成は以下の通りである。

- 第1章 スマホにふれる (ケイン樹里安)
- 第2章 飯テロにふれる (菊池哲彦)
- 第3章 就活にふれる (上原健太郎)
- 第4章 労働にふれる (上原健太郎)
- 第5章 観光にふれる (八木寛之)
- 第6章 スニーカーにふれる (有國明弘)
- 第7章 よさこいにふれる (ケイン樹里安)
- 第8章 身体にふれる (喜多満里花)
- 第9章 レインボーにふれる (中村香住)
- 第10章 「外国につながる子ども」にふれる (金南咲季)
- 第11章 ハーフにふれる (ケイン樹里安)
- 第12章 差別感情にふれる (栢木清吾)
- 第13章 「障害」にふれる (佐々木洋子)
- 第14章 「魂」にふれる (稲津秀樹)
- 第15章 100年前の社会学にふれる (ケイン樹里安・上原健太郎)

スマホを題材にした1章は、まずアーヴィング・ゴフマンの議論を参照しながらスマホを用いた日常的な動作に印象管理や役割演技の側面があることを指摘する。このように人々は能動的に活用しているように見えるが、著者のケイン樹里安は「スマホに触れさせられている」と呼べるような受動的な側面もあると論じている。また検索履歴や購入履歴はユーザーの関心にフィットした情報を選別するが、そのことが自分好みの情報に埋没する「フィルターバブル」を生み出す。このパラドクスの最たるものとしてサイバースケード（炎上）を説明する。

2章は「飯テロ」を題材にしている。飯テロとは食欲を刺激する食物の映像をSNSに投稿することを指す。1章と同様、現代社会における目新しくも身近なテーマといえよう。本章では飯テロを孤食やSNS上のコミュニケーションと関連づけて論じている。著者の菊池哲彦は飯テロを「食事をともにすることなく、おいしそうな食物の映像をシェアすることで、その映像を媒介にして選択しうる関係可能性を不特定多数の人々へと拡大しながら、他者との関係を維持する映像コミュニケーション」と説明する。そして「特定の共同生に縛られることなく、ひとりでありながら可能性としてある共同性を生きることができるところからこそ、飯テロというSNS的コミュニケーションは、他者に気兼ねせず好きなように食事したいという『孤食を受け入れる層』の欲求と親和性が高い」と分析する。

就活をテーマにした3章は、学生が就活世界の「当たり前」を徐々に受け入れていく様子を「社会化」という社会学の重要概念を用いて説明する。著者の上原健太郎は「本当の自分」を発見・演出し、必要に応じて調整する状況をアーヴィング・ゴフマンやアンソニー・ギデンズの議論を参照しながら論じる。さらに本章ではR.K. マートンが提示した準拠集団の概念を用いて、就活を当然視するのは「自身が就活世界を当然とする社会集団に所属し、そこでのルールや価値を学習した結果」だと述べる。

4章は労働を題材にしている。本章では戦後日本の産業別就業率の推移を示しながら産業構造の変容を説明する。著者の上原健太郎は現代を「サービス産業化社会」と捉え、その特徴をアーリー・ホックシールドが提示した「感情労働」の概念などを用いながら論じている。また本章では男女の賃金格差、職種とジェンダーの関係、やりがい搾取、ブラック企業など、現代日本の労働をめぐるアクチュアルな問題を広く取り上げている。

5章のテーマは観光である。本章ではジョン・アリーの議論を参照しながら「単に非日常を謳う場所だけではなく、日常生活と繋がりや連続性を持った場所や文化が観光のまなざしの対象となっていく」と論じる。また2000年代以降に注目されるようになった観光まちづくりについても取り上げている。著者の八木寛之は観光まちづくりでは、地域住民による主体的な取り組みが重要視されるものの、観光客が増加するにつれて地域の記号化・商品化が進むと指摘している。そして地元外の資本が入り込むと地域住民とまちづく

りが乖離するパラドクスを論じている。その負の帰結として著者は都市部におけるジェントリフィケーションの問題点を指摘している。

6章はスニーカーがテーマだ。著者の有國明弘は「さまざまな物語や経路を秘めているスニーカーは私たちに、今までよく知らなかった社会や人々にふれるきっかけを与えてくれるものでもある」と述べ、ディック・ヘブディッジのサブカルチャー論やポール・ギルロイやスチュアート・ホールといったカルチュラル・スタディーズの知見などを参照しながらナイキのエア・ジョーダンにまつわる文化と人種の関係、そこにまつわる意味を説明する。

7章はよさこい踊りを主題にしている。著者のケイン樹里安は1950年代に高知で生まれ、後に日本各地そして世界へ伝播したよさこい踊りを「文化の脱領土化」の事例と位置付ける。一方、高知のよさこい踊りもまたグローバルな音楽文化やダンスの技法が取り入れられており、それがどこの文化 / 誰の文化と簡単に言い切れない状況にあると説明する。

身体をテーマにする8章は「美しさ」を社会学がどのように解釈するのかを論じている。著者の喜多満里花は「社会学者は本質的に美しいものなどないと考える」と説明する。そして「その社会で何が美しいとされるかは、その社会の構成員の大多数が共通してもつ認識によって決定される」という構築主義的な考え方を紹介する。本章は「ある身体にどのような印象を抱くかは、個人の嗜好を超えて社会的文脈が強く影響を与えている」と述べ、人々が社会的に理想とされる身体を強制させられる側面を論じる。一方、社会規範に縛りつけられた「理想の身体」を壊そうとする「対抗的刻印」と呼ばれる実践についても言及している。

9章は性の多様性が主題だ。本章の前半は性的少数者に関わる用語と運動史を簡潔に説明する。後半はフェミニズムの歴史を第一波、第二波、第三波に分けて概観している。著者の中村香住は近年、LGBTやダイバーシティという概念が社会に浸透しているものの、それらは企業の利益拡大の手段である側面にもふれ、手放しで喜べる状況ではないと注意喚起している。

外国につながる子どもを取り上げた10章は、移民や国際結婚の増加に伴い日本の学校の風景も多文化化している状況に目を向ける。著者の金南咲季は一口に外国につながる子どもといっても、彼らの置かれた状況は出身国、国籍、来日経緯、就学時期、母語や日本語の就学状況、家庭の社会経済的背景、将来の居住展望によって大きく異なっており、教育ニーズも複雑だと論じる。著者は学校を「地歴的にも歴史的にも分離していた人々が接触し、継続的な関係を確立する空間」=コンタクト・ゾーンと位置づけ、現状とは異なる社会を想像する足場として捉え直す必要を主張している。

11章はハーフがテーマだ。自身がハーフでもある著者のケイン樹里安は「ある人々を特定のカテゴリーで括り、周縁化し、他者化し、排除する人種化する実践が『ハーフ』を含めた外国に（も）ルーツをもつ人々に対しても行われている」と指摘する。一方でハーフの当事者たちがラベリングを切り抜ける実践をミシェル・ド・セルトーの「技芸」という概念を参照しながら紹介する。著者はこのような折衝・交渉のなかで流動し、変化するハーフのアイデンティティを論じている。

差別感情を主題にした12章は日本と中国の領土問題を取り上げ、両国の敵対関係の中で展開される日本人と中国人の微細な相互行為に注目している。著者の栢木清吾はレス・バックの議論を参照しながら、思い込みや予断を反省する謙虚さと誠実さの重要性を強調する。さらに著者は他者の差別的な発言や行動を批判している当人が、自身の差別感情、自尊心、優越感に無自覚であることが少なくないことを指摘している。

13章は社会学的な視点に基づく障害論だ。著者の佐々木洋子は障害の捉え方を「医学モデル」と「社会モデル」に分類し、社会学が後者を採用すると説明する。著者は障害を個人の努力で乗り越えるべきものとみなすか、社会の責任とみなすか、どちらのアプローチが正しいと簡単に言い切れないとしながらも、私たちが医学モデルに馴染みすぎていることに警鐘を鳴らす。そして社会のあり方を変えようとするならば、障害をもつ当事者だけでなく、「障害のまわり」に目を向け、そのあり方を反省的に捉え直す必要を指摘している。

14章は目に見えない魂を主題としている。著者の稲津秀樹は「人間の集合行為を通じてつくられる社会は、見えない魂をわたしたちに見えるようにしてきた」と説明する。同時に「社会の秩序はあなたを含む人々の魂を巧みに治めようとしてきた」とも述べている。以上の視点に基づき、本章は①儀礼が可視化する魂、②権力に晒される魂、③社会構想における魂、という3つの観点から魂を論じている。

最後の章である15章はそれまでの章とは異なり、社会学の古典的業績を振り返る内容となっている。本章で取り上げられている書籍はエミール・デュルケームの『社会学的方法の基準』、マックス・ウェーバーの『社会学の根本概念』、ゲオルク・ジンメル『社会学の根本問題』の3冊だ。著者のケイン樹里安・上原健太郎はこの3冊が社会的な「ものの見方」の鉱脈に位置づくとして説明する。そして社会的なものの見方を身につけることが社会への「ふれかた」を変えることにつながり、それが社会をより良いものへ変化させる原動力になると主張している。

2. 本書に対するコメント

冒頭で述べたとおり『ふれる社会学』は社会学の入門書だが、オーソドックスなそれとは趣向が異なる。たとえば筆者が執筆メンバーとして関わっている盛山和夫・金明秀・佐藤哲彦・難波功士編『社会学入門』(2017年、ミネルヴァ書房)は社会学という学問の基本的な特徴を示すと同時に、家族社会学、都市社会学、宗教社会学といった連字符社会学の学説史と近年の研究動向を幅広く概説する内容になっている。筆者自身がこれまで社会学の入門書として参照してきたアンソニー・ギデンズ『社会学 第5版』(2009年、而立書房)や長谷川公一・浜日出夫・藤村正之・町村敬志『社会学』(2007年、有斐閣)も基本的に同様の構造をとっている。これらの入門書の特徴を一言で示すなら硬質。研究実績・教育実績が豊富な社会学者による手堅い内容であり、大学院を目指すような読者には最適かもしれないが、初学者には気軽に手に取れるようなものではないかもしれない。

社会学を学ぶ者が必ずしも向学心旺盛なわけではない。なんとなく社会学を学ぶことになった大学生なども実際には多い。また社会学を専攻していなくとも、現代社会を理解する手がかりとしてふれてみたいと思う者は少なくないだろう。このような人々を誘うテキストとして『ふれる社会学』は適している。本書が各章のテーマとして取り上げたスマホ、飯テロ、就活、スニーカーなどは大学生にとってきわめて身近なものだ。このようなテーマを採用することで読者の日常と社会学をつなげる工夫がみられる。本書が勉強臭くならないよう、各章は読者がイメージしやすい具体的なエピソードから始まる。また各章の分量は非常に短い。そのため長い文章に読み慣れていない読者も中折れを心配せずに読み切ることができるだろう。

今日の大学生は情報にふれる主たる手段がスマホに移行している世代だ。金をかけず短い文章でコミュニケーションすることがデフォルトになっている彼らには、先に挙げた3つの入門書は内容的にも分量的にも価格的にも重すぎるかもしれない。筆者自身、大学で社会学を教える教員としてそのことを実感する。以上のことから『ふれる社会学』は、今日の学生の関心や特性に目を配り、読みやすさにこだわって編まれている点が高く評価できる。

一方、そうであるがゆえの欠点もある。身近なテーマを取り上げ、それを社会学の知見に絡めながら論じているものの、紙幅が限られているため説明が不足しがちなのだ。一つのテーマに対して様々な学者の議論を参照するのは基本的に良いことだが、なかにはそれらの繋がりが不明確で、散漫な印象を受ける章があった。また、ある章は当該分野の学説を丁寧にレビューしているが、ほとんどエッセイに近い内容の章も複数あった。率直なところ本書を社会学の入門書と位置づけるのか、それとも社会学的なエッセンスを盛り込ん

だエッセイと位置づけるのか判然としない。両方を味わえることが本書の売りかもしれないが、評者には編集方針の不徹底のように思えた。

この点を類書と比較すると分かりやすいだろう。近年出版されたリーダブルな社会学の入門書に工藤保則・大山小夜・葛西賢紀が編集した『基礎ゼミ 社会学』（2017年、世界思想社）、筒井淳也・前田泰樹の『社会学入門——社会とのかかわり方』（2017年、有斐閣）、友枝敏雄・山田真茂留・平野孝典が編集した『社会学で描く現代社会のスケッチ』（2019年、みらい）がある。これらは大学の講義や演習で使いやすい作りになっている。一方、『ふれる社会学』は著者の強い関心や具体的経験を軸に各章が書かれている側面があるため、大学の講義ですべての章を扱うのは難しいと評者は判断した。むしろ読者自身が『ふれる社会学』と丁寧に向き合うことで社会学の魅力に触れる契機になるのではないだろうか。

ここまで『ふれる社会学』が一般的な入門書と異なる点を述べてきた。最後にそのことを端的に示す一節を引用する。

悲しみ、悩み、さらには喜びといった日々の暮らしのなかで経験されることがらは、たいていの場合、きわめて個人的なものとして認識される場合が多い。そうした感情の揺れ動きや自分が置かれた状況も、実際には社会の仕組みに振り回されている可能性があるにもかかわらず。（中略）わたしたちは社会の一員であり、社会に振り回されるだけでなく、それを組み変える存在でもある。それゆえに、私たちの社会のしくみへの「ふれかた」しだいでは（意図にかかわらず）人々を傷つけてしまうことがある。

編者のケイン樹里安と上原健太郎は上述の認識に基づき、以下の2つの力を培う必要を15章で提示する。一つはマジョリティの特権に甘えながら無意識に暴力をふるっていないか自省する力であり、もう一つは特定の社会的カテゴリーを生きる人々に困難や負担が集中しがちな社会をより良いものへ変えていく力である。この視点は本書の通奏低音にもなっている。『ふれる社会学』は現代社会を生き抜くことのままならなさを当事者に近い目線で取り上げながら、よりマシな社会を希求している。ここまで読んだ読者はおおよそ想像がついていると思うが『ふれる社会学』はキャッチーな雰囲気をもつつも入門書としては意外なほどに熱を帯びているのだ。その点が類書にない最大の特徴といえるだろう。

参考文献

- アンソニー・ギデンズ, 2009, 『社会学 第 5 版』而立書房.
- 長谷川公一・浜日出夫・藤村正之・町村敬志, 2007, 『社会学』有斐閣.
- 工藤保則・大山小夜・葛西賢紀編, 2017, 『基礎ゼミ 社会学』世界思想社.
- 盛山和夫・金明秀・佐藤哲彦・難波功士編, 2017, 『社会学入門』ミネルヴァ書房.
- 友枝敏雄・山田真茂留・平野孝典編, 2019, 『社会学で描く現代社会のスケッチ』みらい.
- 筒井淳也・前田泰樹, 2017, 『社会学入門——社会とのかかわり方』有斐閣.